

九州産業考古学会報

第7号 2006年10月10日発行 発行元：九州産業考古学会

地域住民のための近代化遺産

平島勇夫（小会会員）



今年の6月、大牟田市議会で「大牟田市近代化遺産保存活用基金条例」が、特に大きな議論を醸し出すこともなく可決された。基金設置の趣旨は、「大牟田市に残された貴重な文化財である近代化遺産を的確に保存整備し、有効に活用する」ためとされている。全国には様々な基金があるが、近代化遺産に特化した基金を持つ自治体は、大牟田市くらいなものではなかろうか。

大牟田の歴史において三池炭鉱が果たした役割の大きさからして、このような基金が設置されることは、ある意味では当然ともいえよう。すでに数百万円が積み立てられ、今年中には数千万円規模まで膨らむ見通しとのことで喜ばしい限りである。又その基金のほとんどが地元企業からの寄付というのも、企業の社会貢献のあり方として大いに評価される。しかし問題がないわけではない。この基金の成否は、今後、市民の一人一人が近代化遺産にどれほど身近に関わっていくかに懸かると思われる。

現在私は、大牟田市中央公民館に勤務している。前の生涯学習課時代にも薄々感じていたことではあるが、当市にある近代化遺産は、市民から評価されているというよりも、国や県や市の指定・登録文化財となっているが故に評価されてきたという側面が強いのではなかろうか。多くの市民が公民館に来て、サークル活動やボランティア活動、地域活動に取り組んでいるのを見るにつけ、近代化遺産に関わる人たちを殆ど眼にしないことが残念でならない。

県内でも、志免町の立坑櫓や飯塚市の伊藤伝右衛門邸については、多くの住民が関わり、困難を乗り越えて、保存にこぎつけたという経過がある。それに対して大牟田市では早くから国や県の支援があり、その分住民があまり関わらずにすんだため、「近代化遺産は行政の仕事」といった認識が住民の間にできてしまったのではないか。これでは大牟田の近代化遺産は、いつまでたっても「地域の誇り」にも「観光資源」にもなり得ないだろう。

条例の制定に見るように、大牟田市では近代化遺産は、市政における重点事業のひとつにまでなっている。今後は、近代化遺産の数々を地元の人たちに身近に再認識してもらい、まさしくわが町「大牟田の宝もの」と実感してもらわないといけないうだろう。それが真の保存と活用につながるものであり、その手だてこそがいま行政に求められている。

【報告】

2006年度総会・見学会

青地学（ポリテクセンター八幡）

2006年度の総会および見学会を6月17日(土)に朝倉郡東峰村(旧宝珠山村)において開催した。

午前の見学会は、梅雨空と交通の不便にも関わらず、10名の参加者を迎えての実施となった。戦前に石炭輸送のために計画されたJR日田彦山線の釈迦岳トンネルを出てすぐの筑前岩屋駅を下車し、駅の裏山にあるトンネル工事殉職碑へと向かう。昭和30年につくられた殉職碑は、コンクリート製で坑門をモチーフとしたシンプルで垢抜けたデザインで、難工事を完遂させるための研ぎ澄まされた意志を感じさせる。関係者によるものであろうか、手入れが行き届き、訪れた日も献花されていた。



図 釈迦岳トンネル殉職碑

筑前岩屋駅を後にして総会の会場となる「山村文化交流の郷いぶき館」(以下、いぶき館)を目指し、JR日田彦山線に沿って隣の大行司駅方面に歩いて進む。途中、鉄道の美しいコンクリートアーチ橋をいくつか見ることができる。



図 金剛野橋

さらに進むと懐かしい感じの木造の校舎らしき建物が見えてくる。これは旧宝珠山小学校で、現在は「ほうしゅ楽舎」、「農村ツーリズムの宿」として再生されていて、薪で沸かす五右衛門風呂も体験できる。



図 ほうしゅ楽舎

大行司駅まであとわずかのところで、国道沿いに古めかしくも懐かしさを感じさせる建物が残る一角がある。その一つは、昭和12年にできた旧宝珠山村役場であり、現在は昭和倶楽部として使われている。ここでは、地元有志で構成される寶珠山至誠塾が、宝珠山炭坑にゆかりがあった高倉健に関する絵看板やポスターを展示している。建物の修復に際しては、往年の姿にできる限り戻すように配慮され、歴史ある元役場の建物としての価値も大切にされている。



図 昭和倶楽部

大行司駅舎は、昭和 21 年の開業から現在に至るまで使用されており、開業当時の雰囲気をよく伝え、落ち着いた佇まいである。



図 大行司駅

大行司駅から約 10 分で「いぶき館」に着く。その途中、宝珠山炭坑の第一坑坑口を見学する。しっかりとした石組みの坑口にある石の銘板は英語併記であった。



図 宝珠山炭坑坑口

ここで見学会参加者の記念撮影をしたが、改めて思うと、参加者は福岡県内からのみであり、今後は他県からの会員が参加しやすい企画の必要を感じた。



図 見学会参加者

「いぶき館」で昼食の後に総会が行なわれ、事業報告、会計報告などがなされた。役員については 2 年任期の途中ということで留任となった。



図 いぶき館

会報 5 号でも少し紹介したが、「いぶき館」の建物は、筑豊の石炭王と言われた伊藤伝右衛門の本邸の一部を、宝珠山炭坑の幹部の社交場として移築したものである。

開催されていた「伊藤伝右衛門展」を見学したあと、この日の特別講演である深町純亮氏による「柳原白蓮の生涯」を聴講した。講演会場は各地から大勢が詰め掛けて大混雑となった。伊藤伝右衛門の社会的貢献や柳原白蓮の生涯が様々なエピソードを交えながら紹介され、熱気あふれる会場がさらにどっと沸く場面が多くみられ、1 時間半の講演時間もあっという間であった。この熱気を産業遺産の保存と活用に何とか

つなぎたいと思われることであった。



図 混雑する講演会場

「いぶき館」では樋口朗館長に、昭和倶楽部では寶珠山至誠塾代表の田中克之氏に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。



【報告】

「鷗外の道」直方見学会

市原猛志（九州大学大学院）

8月27日、日曜日のしかも9時半という早めの時間にも関わらず、直方駅には50人近くの見学者が詰めかけていた。直方の駅と街並みに対する住民の関心度が高いことが分かり、案内役の私にも緊張が走った。

見学コースはまず現在解体問題が持ち上がっている直方駅の歴史的構造的特徴を説明した後、初代直方駅跡へ移動した。そこから、かつて森鷗外がたどった旧貝島邸跡までの道を歩き、長崎街道沿いにある直方歳時館（旧堀三太郎邸）を見学した。ここで折り返し、お茶の前田園では奥深い蔵を見学、さらに直方谷尾美術館（旧奥野医院）を始めとする直方の医院建築街をそぞろ歩き、今回一番の見どころであった旧讃井医院を見学した。

医院の外観は一見すると個人病院だとは思えないような、塔屋を持った大振りな造りである。内部も投薬口や診察室など各所

に当時流行しつつあったアールデコの名残を感じさせる。また2階はがらりと雰囲気が変わり和室が広くとられていて、和洋折衷の特徴をもっている。建物全体の色彩が整った空間に、見学者も感心しきりであったようだ。

最後は商店街を縦断して圓徳寺で昼食会を行い、見学会は解散となった。当日はNHK等の報道機関も訪れ、駅舎保存活動に大きな弾みがついたことは間違いないだろう。主催者の「直方駅のあり方を考える会」は、今後継続的に語り部の会を行うなどして、保存運動を展開したいとしている。



写真 当日見学した讃井小児科医院



【短信】

産業考古学について考える

尾崎徹也（小会会員）

私は最近入会させてもらいましたが、職場でまさに現代的商品である電子部品を生産する多々あります。私が職業人になったのは、いわゆる高度成長期でした。

この時代の日本は、社会的危機を内包しつつも成長を志向し、技術立国、経済大国への道をひた走っていました。「所得倍増」のスローガンの下、次々と生み出される電化製品やモータリゼーションの進行は、生

活や社会のありさまを大きく変え、大量消費時代を実現しました。この時代は現代日本の原型を成した時代であったといえるでしょう。そこで働く人の根幹をなすものは「勤勉」であり「真面目」であり、コツコツやることが評価される時代でした。しかし成長の一方で、公害や環境破壊によって企業の社会的責任が問われるようになり、また石油危機を契機に、人々の価値観も大きく変化していきました。

高度成長が過去の話となった現在では、安定期（低迷期かもしれません）とはいえ企業の不祥事が目に付きます。それもいずれも日本を代表する、歴史と重みを持つ企業です。まさに企業倫理崩壊の時代といえるかもしれません。ただ、総じていえるのは何れの不祥事も究極的には「人災」であるということです。産業の基盤を成すのは3M（ヒト man、モノ material、カネ money）といわれます。今も昔も変わらぬものの人と思うのですが、その人が変わってしまったのでしょうか。

ここに至って、人を育て人を活かす経営が重要になっていると思います。因みに明治時代は、会社と労働者が運命共同体意識が強かった時代ですが、筑豊御三家と呼ばれた麻生、貝島、安川の三者が、いずれも教育に目を向け学校を設立していることは注目されます。

明治大正の経営風土は、人の生活を真剣に考え、未来永劫に企業を存続させ、従業員の暮らしを守ることを経営理念に盛り込んでいるようです。今に見る産業遺産は、どの建物や施設構造物等も「なるほど百年でも持つ丁寧な作り」と唸るほどで、現代感覚で見ても「ここまで丁寧に作らなくても」とか「これほど立派な物が必要だろうか」とか考えてしまうところです。そこに当時の企業家や経営者のいわば「思い入れ」のようなものを感じるのです。

団塊世代の一斉退職（2007年問題）を控え、加えて長年の少子化の影響で、これからは人手不足時代が始まるだろうといわれています。今みたいにアウトソーシング全盛で、いつまでも商品作りや人作りを他人任せにしている、遠からず企業は立ち行かなくなるでしょう。商品も社員も高品質を保つ、それこそ企業倫理というべきです。

若者達に「企業は何のためにあるのか」を教える時、社会正義や企業倫理について、産業遺産を通じて色々と考えてもらえるように思います。当時の経営者は、また従業員はどういう風に考えてこれを作ったのか、その時代背景はどうだったのか、そうしたことに思いを馳せていくと、今の我々が置き忘れてきた大事なものが見えて来るように思うのです。最近の産業界の流行言葉は、当社の製品は「地球にやさしい」とか「環境にやさしい」などですが、その前にまず「人にやさしい」企業でないとい何にもならないと考えています。



【短信】

にあんちゃんの里

砂場一明（小会会員）

少し前のことになるが、ドライブを兼ねて会員仲間と佐賀県唐津市の産業遺産を見に行った。唐津の近代化に関わる銀行や商社などの建築物や町並みを散策した後、もう少し足を伸ばそうということになって、同県最西北端に位置する旧炭鉱町「にあんちゃんの里」を訪ねた。「にあんちゃん」（二番目の兄ちゃん）とは、「十歳の少女の日記」をもとに昭和33年（1958年）に出版された本（安本末子著）の題名であり、ベストセラーとなって映画化もされた。

昭和30年前後の肥前町（現・唐津市）の杵島炭鉱大鶴鉱業所の炭鉱住宅を舞台に、

両親を失った兄妹四人が貧困にめげず助け合って懸命に生きていく姿を綴ったもので、西日本新聞社から数年前に復刻版が出版されている。最近読み返してみたが、本書の「解説」欄に次のような記述がある。(以下引用)

《炭鉱は跡形もなし》 何もなかった。これほど跡形もなく何もかも消えうせていようとは思わなかった。昭和33年廃山になってから、まだ、たった10年もたっていないではないか。なるほど道端にベトンの坑口が雑草に埋もれ、ボタ山が入江のむこうに三角形の頭にうっすら草をはやしているし、足もとには炭を積みこんだ船着場のこっている。そして狭い入江を渡る索道用のコンクリート橋は、半分ほど白い残骸をさらしている……それ以外に杵島炭鉱大鶴鉱業所の跡は何一つみえない。(杉浦明平、昭和41年、引用終り)

私どもが訪れたのは、この文が書かれてから更に40年を経ていることになるが、そこで見たのは、何とこの文章と寸分違わぬ情景ではないか。石炭産業が終焉した途端に様相を一変させた町だが、その後は時間が止まったようである。産業景観がめまぐるしく変わっていく昨今、このような奇跡的な町にも出かけてみられてはいかがですか。



写真 杵島炭鉱大鶴鉱業所 第二坑口跡

【お知らせ】

第6回全国産業観光フォーラム in 北九州

期日：2006年11月16～17日

会場：北九州国際会議場（小倉駅北口歩いて5分）

16日日程 13:00～20:30

基調講演：「産業観光パワーアップの道」
山根一眞（ノンフィクション作家）

須田寛（JR東海相談役）

パネルディスカッション：「時代を切り拓く産業観光」 14:15～16:10

コーディネーター 山根一眞

コメンテーター 伊東孝（日本大学教授）
高橋和憲（日本商工会議所）

利島康司（安川電機社長）

青山佳世（アナウンサー）

オブザーバー 須田寛

分科会：「産業技術の伝承と産業観光」

「世界に発信する環境都市」

「近現代遺産を活用したまちづくり」

の3部会（小会会員もバネリスト参加）。

交流会・門司港レトロ、和布刈夜景ツアー

17日日程 半日～終日

エクスカージョン（見学会）：4コースに分け、市内産業や環境産業、県内の伝統産業などを巡る。現在コース策定中。

お問い合わせ：全国産業観光フォーラム

in 北九州2006実行委員会事務局

（北州市経済文化局観光課内）

TEL：093-582-2054 FAX：093-581-9352

URL：

<http://www.city.kitakyushu.jp/page/kankou/forum/>

会員多くの皆様のご来訪を心よりお待ちしております。

【お知らせ】

門司港まちづくりシンポジウム

全4回を予定した連続シンポジウムです。
門司港発の観光まちづくりに興味のある方、
門司港ファンの方などなど、ぜひともお越しください。

期日：2006年10月18日（水）

19：00～20：30

場所：観光物産館・港ハウス2Fホール

テーマ：「門司港の歴史的建物を見直す」

基調講演：

東川隆太郎

（地域フォーラム・かごしま探検の会理事）

シンポジウム：

コーディネーター

逆井健（未来工房下関塾）

パネリスト

竹中康二（門司赤煉瓦倶楽部）

白石洋一（門司港魅力づくり応援団）

渡辺功一（北九州COSMOSクラブ）

春田佳菜（北九州市立大学院生）



写真 現在保存のための募金活動が行われている旧料亭・三宜楼

【お知らせ】

しめの文化財ウォーク

期日：2006年11月3日（祝）

集合時間：午前9：15シーメイト前駐車場（志免町大字志免451-1）

1部「志免炭鉱ウォーク」

10：00～11：45

第八坑連卸坑口 ポタ山 志免町産業遺産収蔵庫 鉄道記念公園

2部「みぢかな史跡ウォーク」

13：00～15：30

産業遺産収蔵庫 方ヶ島八幡宮 庚申尊天 大日堂

なお雨天時には、シーメイト2F研修室において上記に関する「歴史講座」を行います。皆様のご参加をお願いいたします。



【お知らせ】

九州伝承遺産ネットワークシンポジウム

テーマ：『世間遺産を探そう』

身近な遺産から - 改めて地域活性化を考える -

開催日時：11月23日（祝）

13：30～17：00

会場：未定（長崎市内を予定）

基調講演1：「世間遺産とは」

講師 東川隆太郎

（地域フォーラム・かごしま探検の会理事）

基調講演2：各県の取り組みについて

九州伝承遺産ネットワーク所属NPOによる紹介

世間遺産発表会：パネリストを公募予定

お問い合わせ：九州伝承遺産ネットワーク

長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷456-11

NPO軍艦島を世界遺産にする会

TEL&FAX：095-883-8811

E-mail：doutoku@viola.ocn.ne.jp

会報第7号・目次

【巻頭言】		にあんちゃんの里	
地域住民のための近代化遺産		砂場一明 5
.....平島勇夫	1		
【報告】		【お知らせ】	
2006年度総会・見学会		第6回全国産業観光フォーラム in 北九州	
.....青地学	2	6
「鷗外の道」直方見学会		門司港まちづくりシンポジウム	
.....市原猛志	4	7
【短信】		志免・文化財ウォーク.....	7
産業考古学について考える		九州伝承遺産ネットワークシンポジウム	
.....尾崎徹也	4	7
		今後の予定	8

(お知らせ内の各イベントは、頁末の当会ウェブサイトからもご確認ください)

今後の予定

当会の今後の予定は以下の通りです。

月・日	活動内容
11月 16～17日	全国産業観光フォーラム in 北九州 2006
12月	
1月	会報第8号発行
2月	筑豊炭鉱遺産シンポジウム

【予定は都合により変更する事があります】

会費納入・ご寄付のお願い

当会は事務局体制や会報を充実させるため、会則により年会費を個人会員2000円、団体会員は5000円徴収させて頂く事になりました。産業考古学発展のため、非会員へも送付する方針は維持しますが、当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付についてどうぞ宜しくお願いいたします。

会費・寄付先口座【郵便口座に変更！】

17430-88882241

キョウシュウサンギョウコウコガツカイ

< 編集後記 >

今号から編集体制に若干の変更が行われた。これを機会にデザインパターンをいくつか追加したのだが、感想などお聞かせ願えれば幸いである。九州各地で近代化産業遺産に関連するイベントが次々と行われるようになった。小会でも逐次情報を追ってはいるが、全体の把握は難しい。もしイベントの情報をお持ちの方は、メールやサイト掲示板での連絡を切にお願いしたい。ひとつひとつの情報の積み重ねが、産業考古学の発展に繋がるものと信じている。(市原)

九州産業考古学会事務局 〒 807-0022 福岡県遠賀郡水巻町頃末北4丁目 11-7-204 青地学 気付
TEL&FAX : 093-202-5054 E-mail : aochimanabu@yahoo.co.jp
URL : <http://cgi.f17.livedoor.ne.jp/~heritage/>